

特246

18



0054152000

0054152-000

特246-18

郷土舞踊と民謡

日本青年館

昭和6

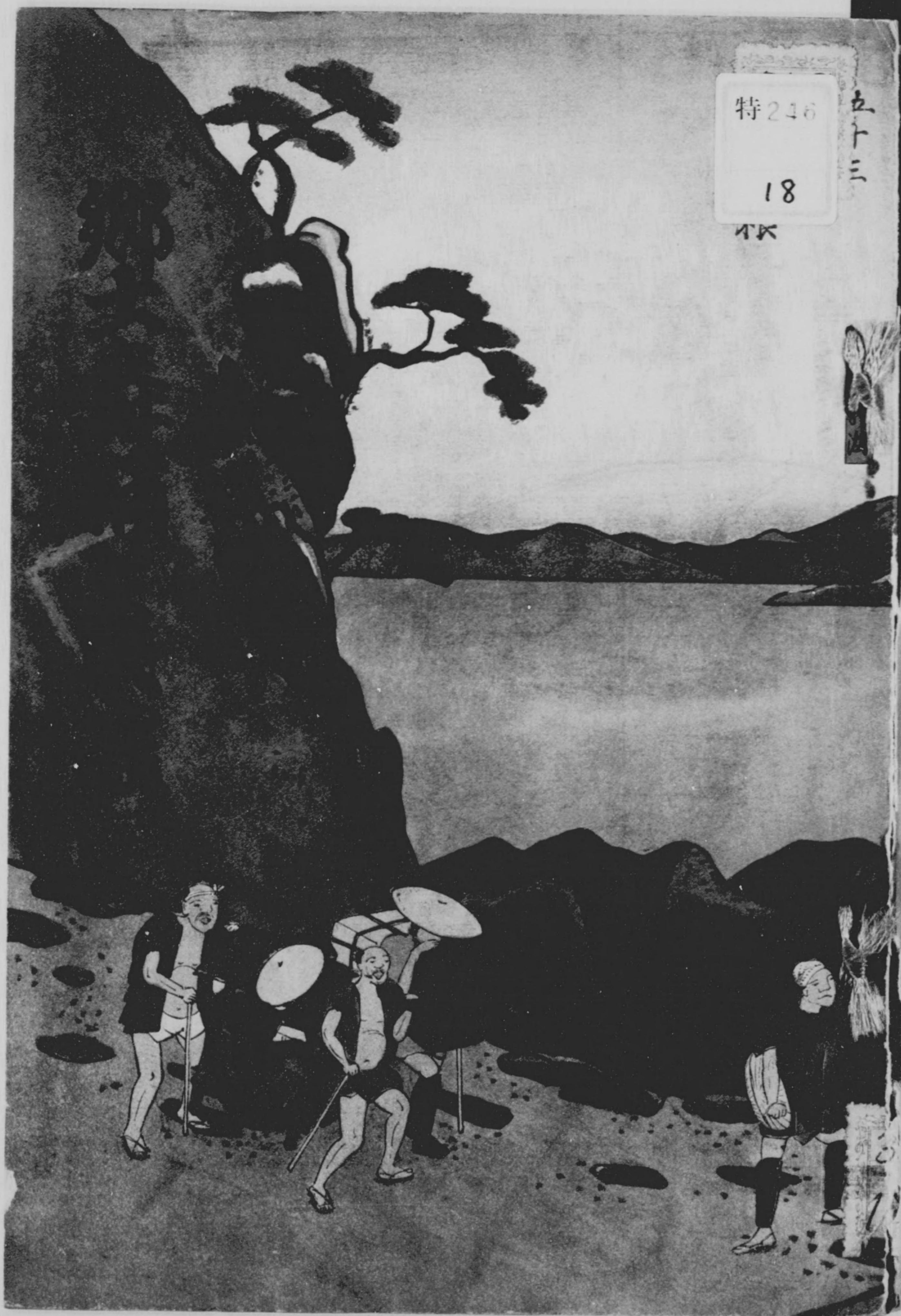
AIC

特246

18

TK

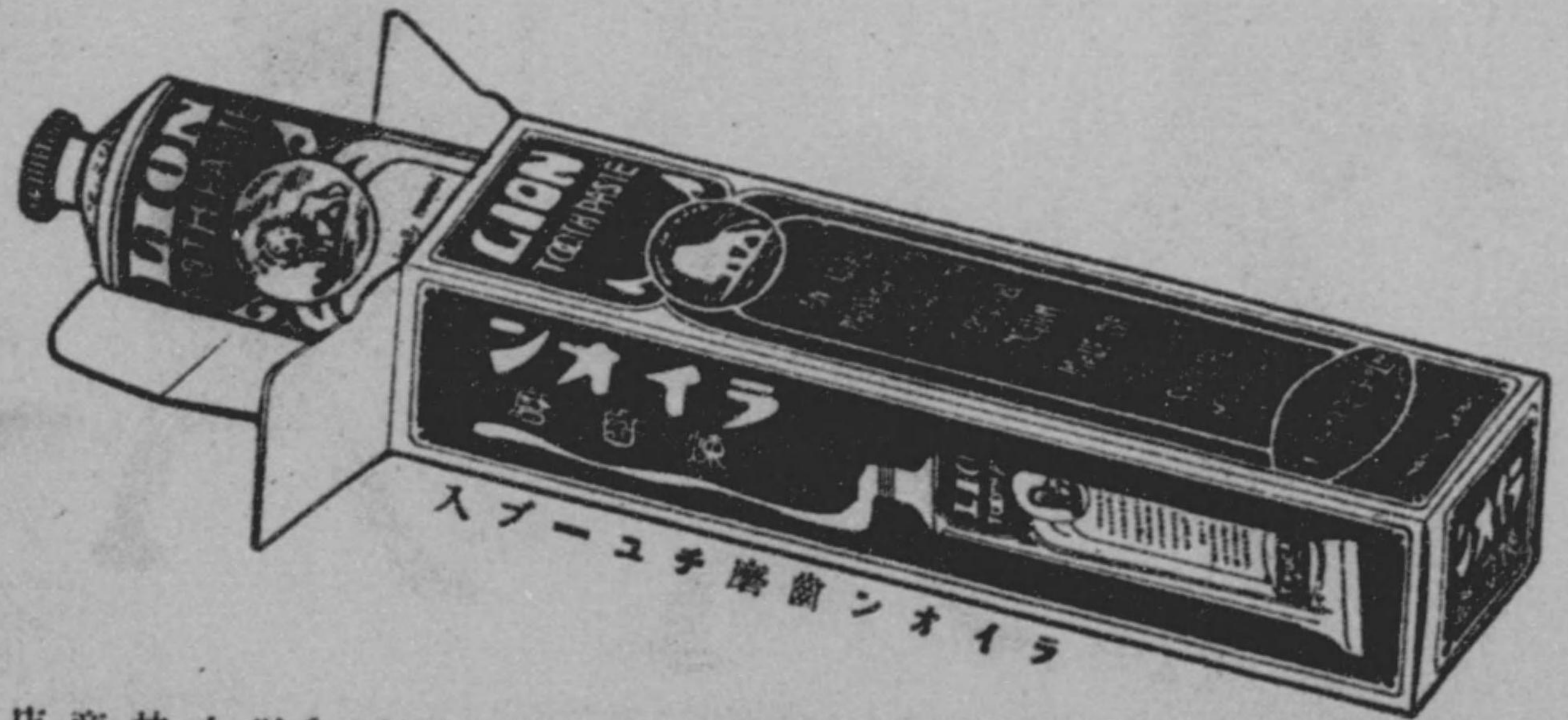
五十三



特246
18

唄をうたふなら

唄をうたふなら お歯をきれいに、
 花のやうに しろく きれいに、
 ライオン歯磨で お磨きなされ。
 お聲の艶が欲しいなら、
 星のまばたく 夜十時、
 ライオン歯磨で 歯をみがき、
 すずしく すずしく さわやかに、
 そよかせに
 吹かれ心地にお眠りなされ。



ライオン歯磨本舗株式会社 小林商店

キリンビール

民謡は郷土の華
 麒麟は麥酒の粹

清涼飲料

キリンレモン

サイダー
タンサン

麒麟麥酒株式會社



第六回 郷土舞踊と民謡 序目

第一部

羯鼓踊

三重縣

長持唄

ヨササぶし
その他

神奈川縣

鬼來迎

千葉縣

休憩

第二部

花笠舞
その他

山形縣

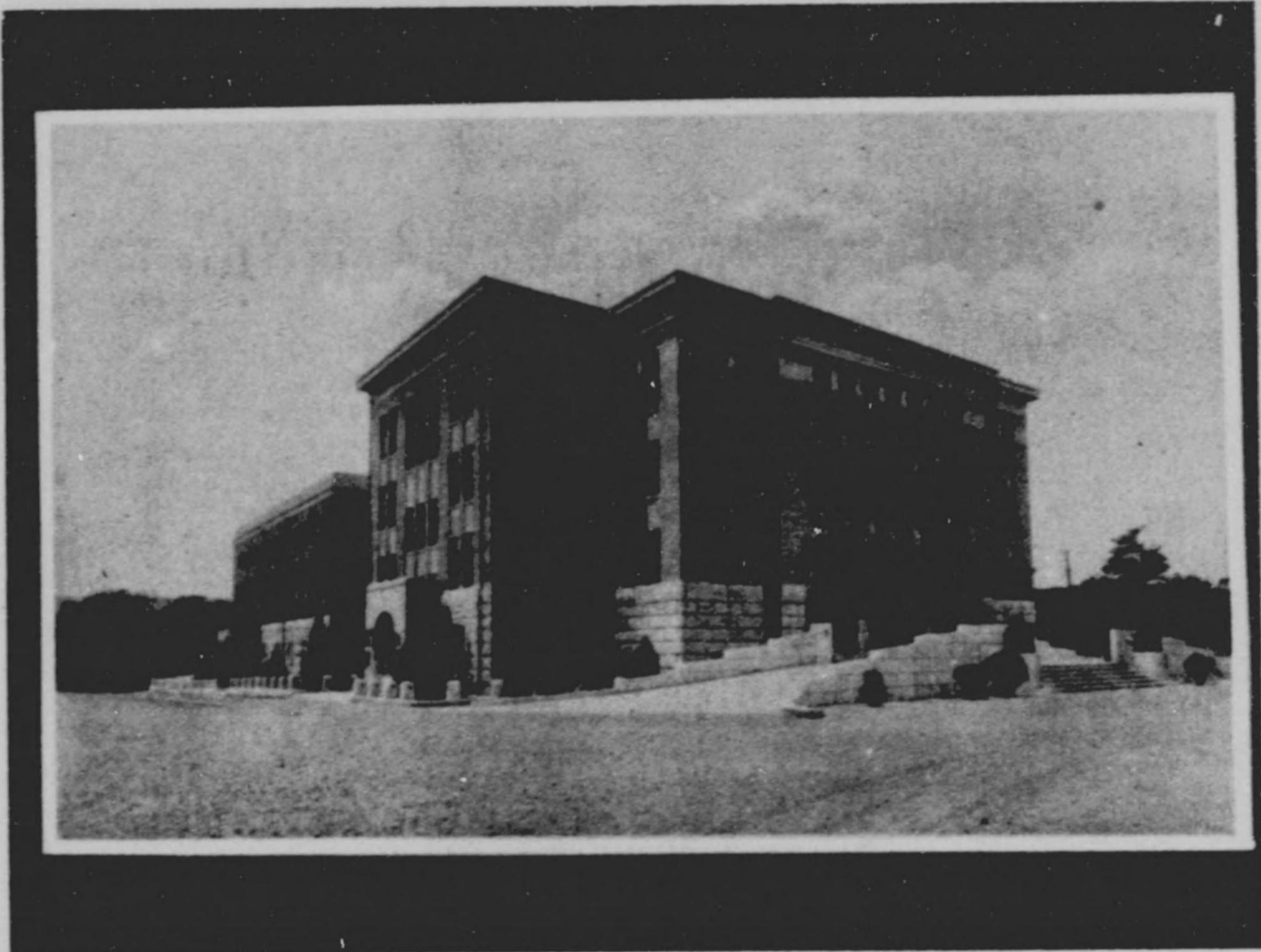
伊豫萬歳

愛媛縣

南條踊

山口縣



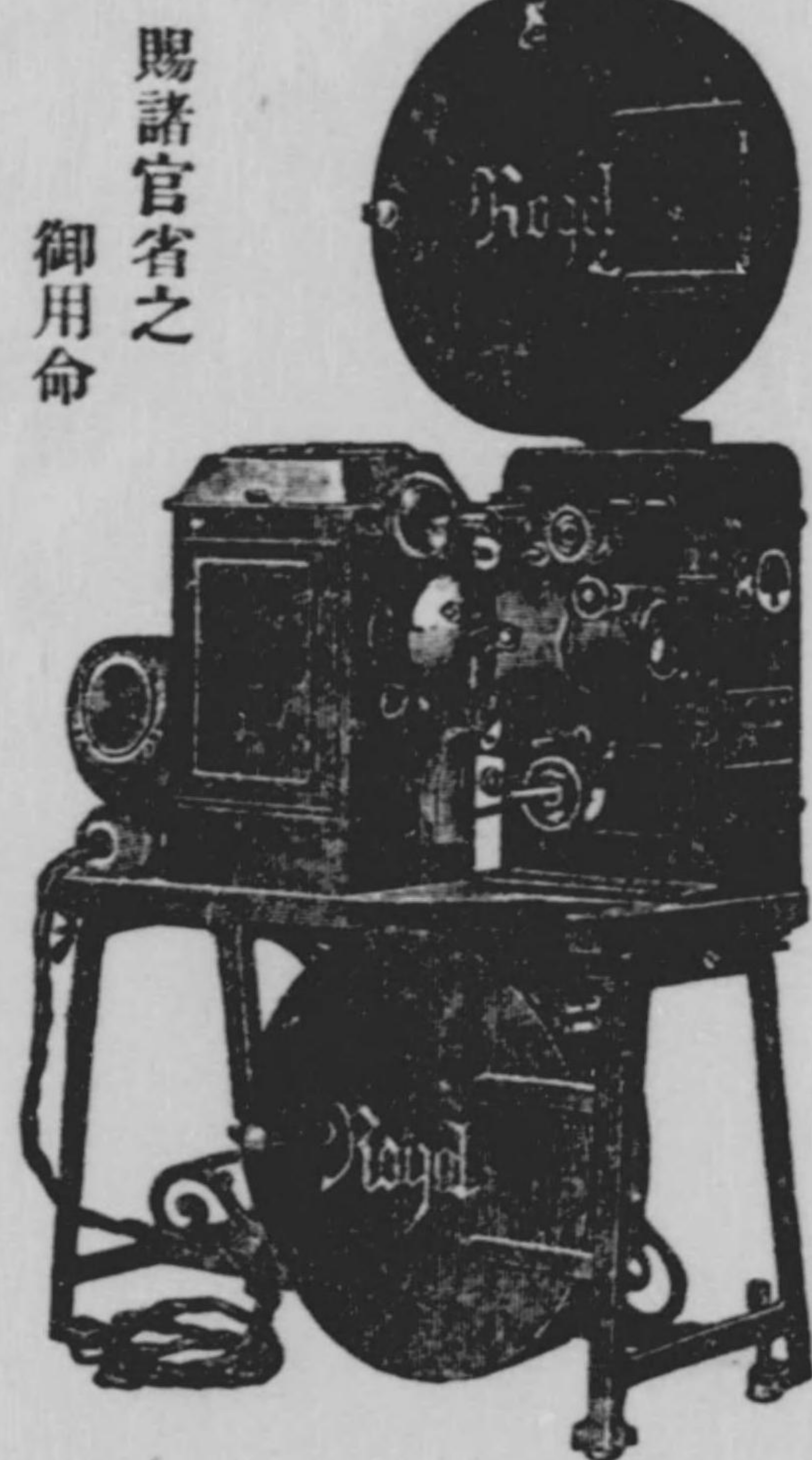


るす倒壓を品入輸々堂

機寫映ルヤー口の密高

威權の産國

斷然舶來品に優越せる
純國産の標準映寫機！
商工省選定、本邦唯一の代表優良機！



賜諸官省之
御用命

色特

- △絶對安全……防火装置は完備せり
- △光力強大……畫面の鮮明比類なし
- △電珠共用……五百乃至千ワット共用
- △操作簡易……取扱ひ操作は全く簡便
- △機械堅牢……耐久力は内外無比
- △能力絶大……完全なる二十間の映寫
- △携行容易……鞆二個に納め却つて輕便
- △價格至廉……外國製品の半價

型Eルーヤロ用帶携
也圖十五百四金價正

付書明說取扱
呈進グロタカ

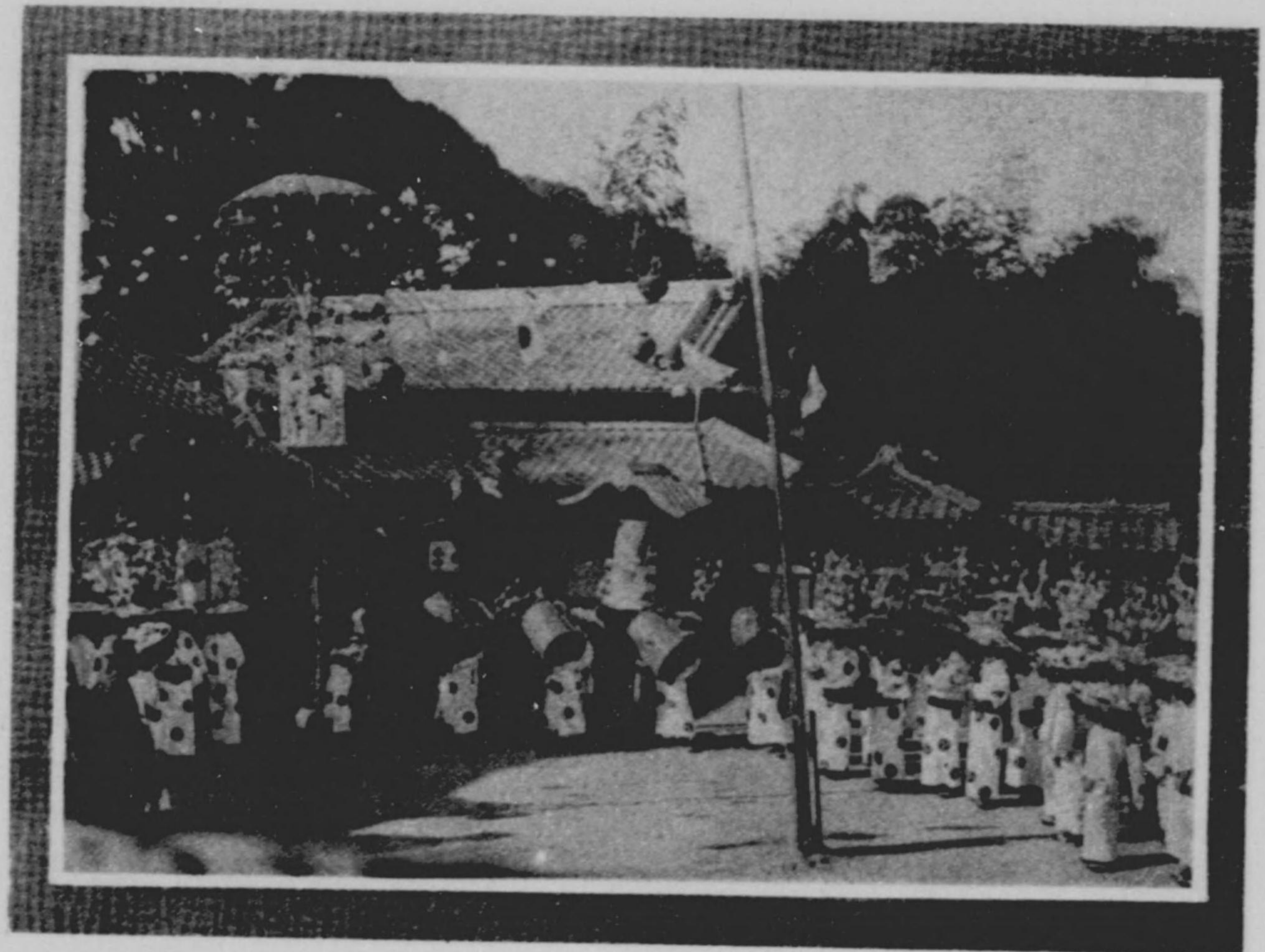
一九四三原向町鴨巢西外市京東

場工密高 名社合會

番二四〇一塚大話電



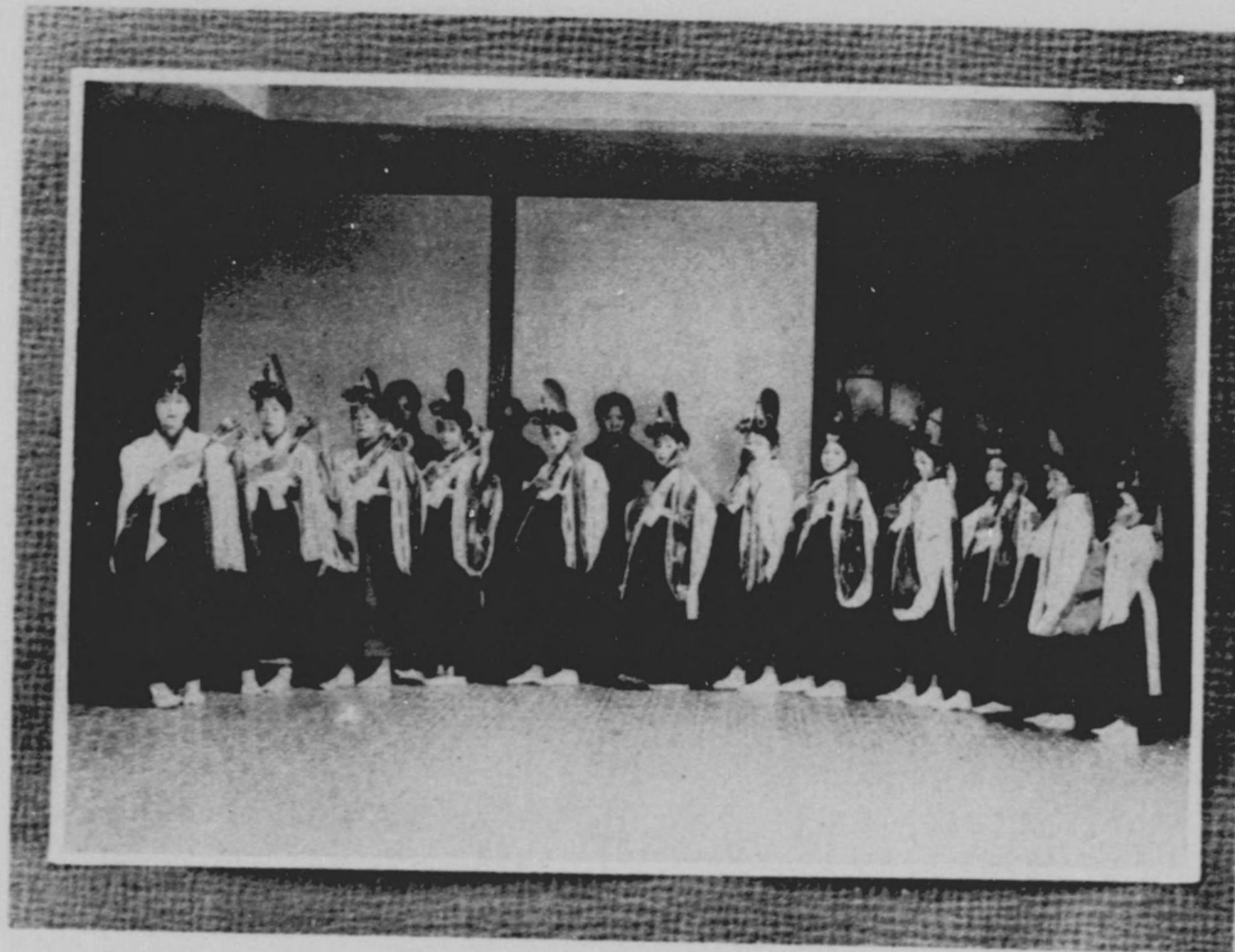
長持唄



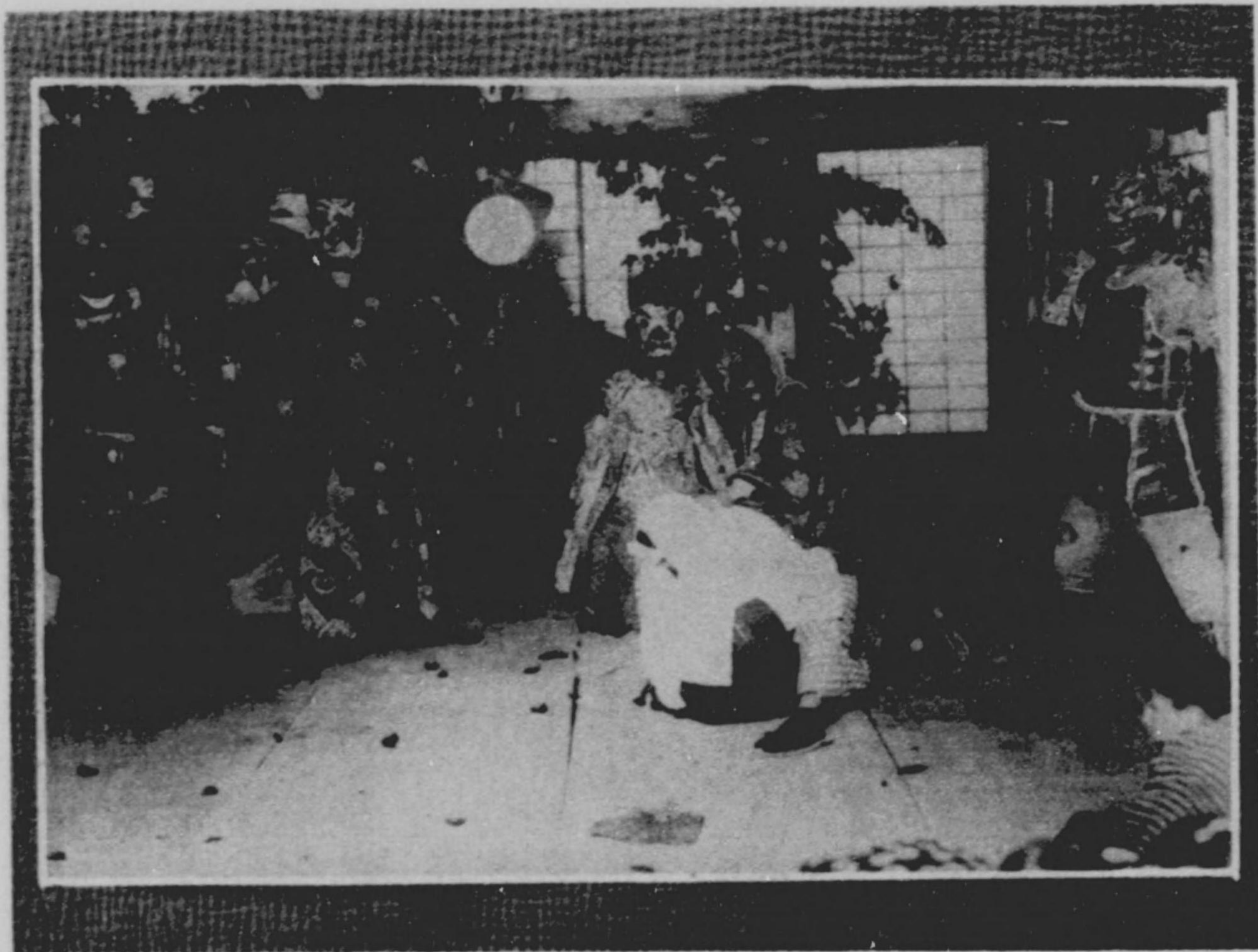
鞆鼓踊



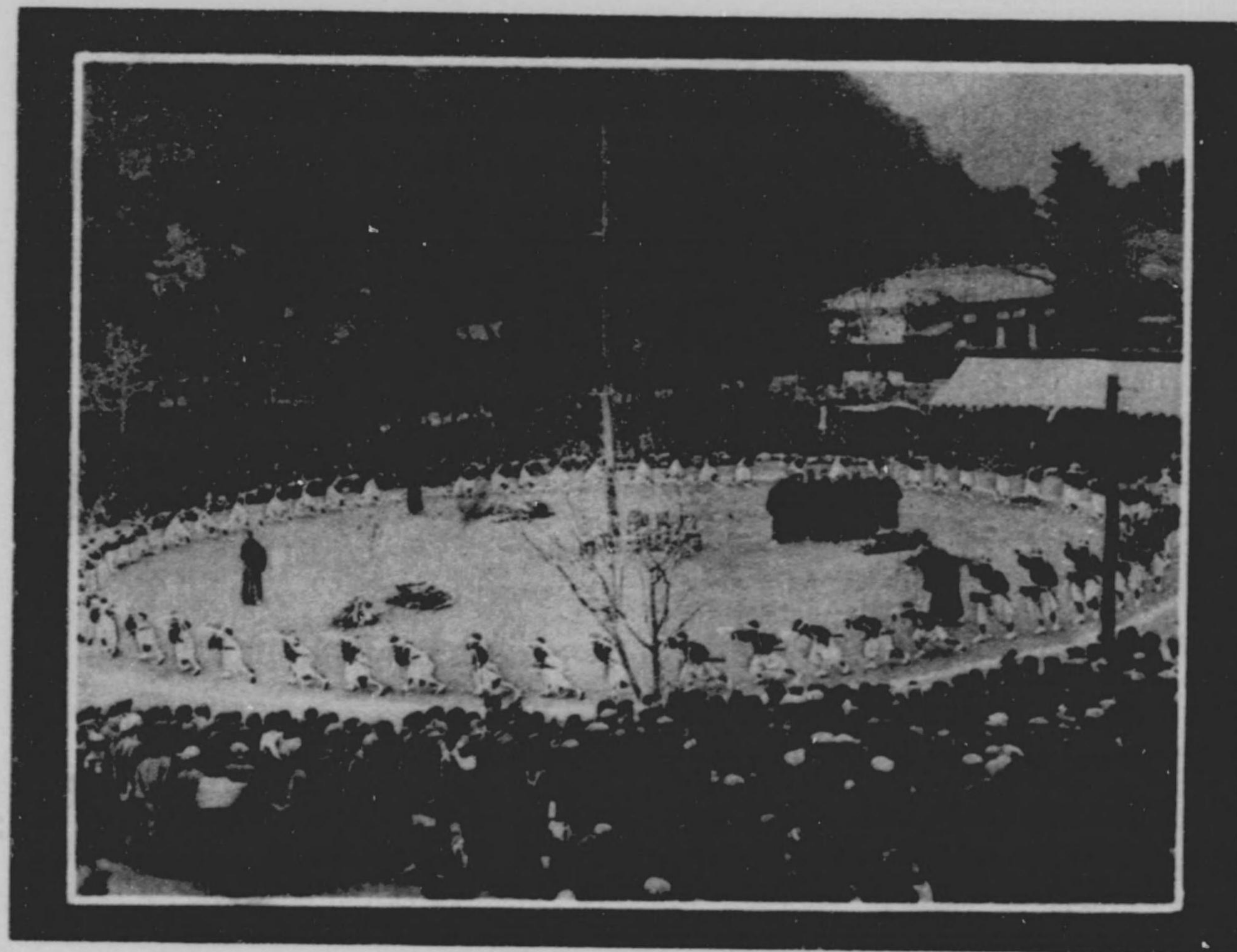
伊豫萬歳



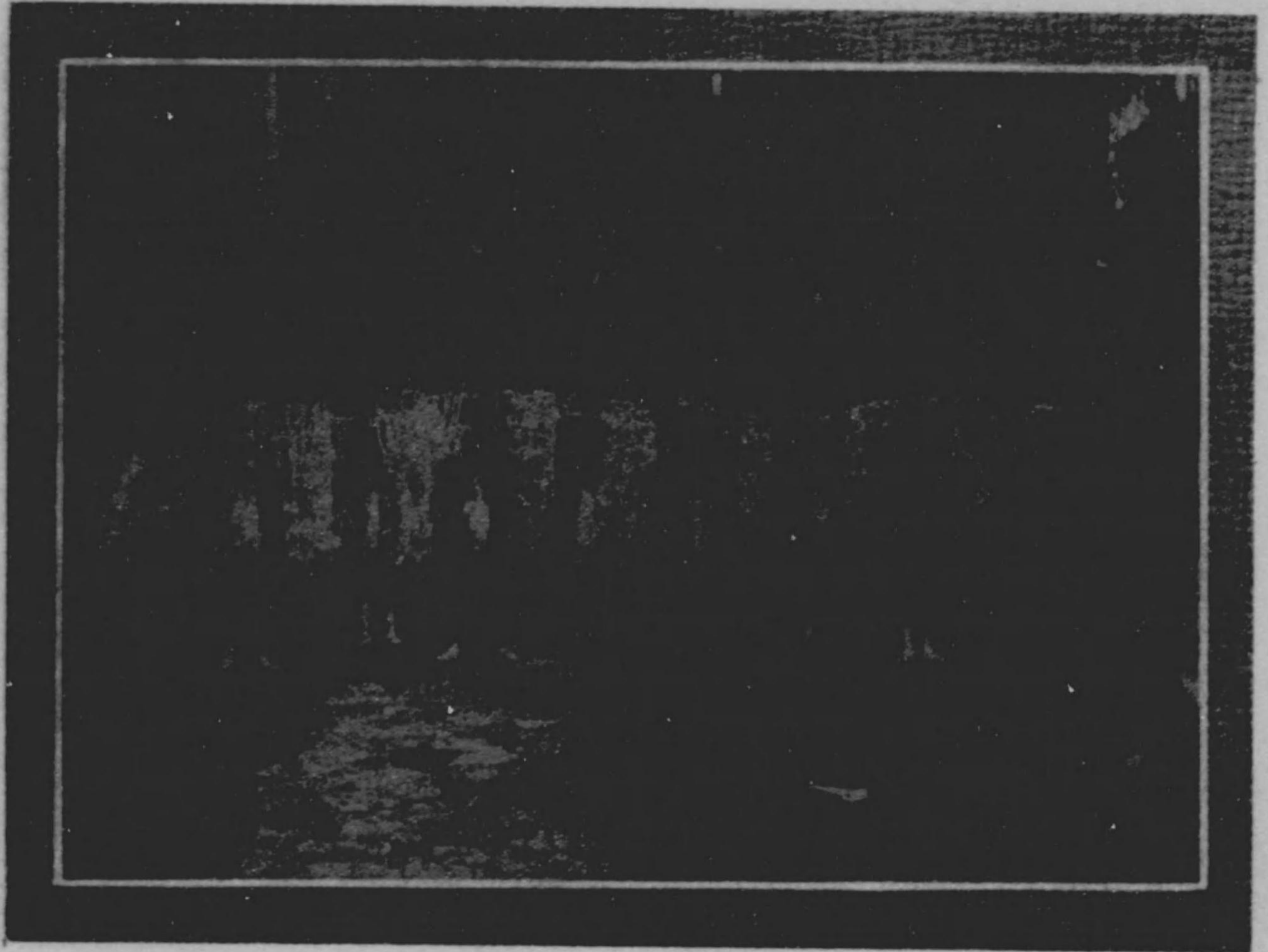
お伊勢参り
(おささよの他の中)



迎來鬼



踊條南



花 笠 舞

羯 鼓 踊

三重縣 鈴鹿郡 高津瀬村

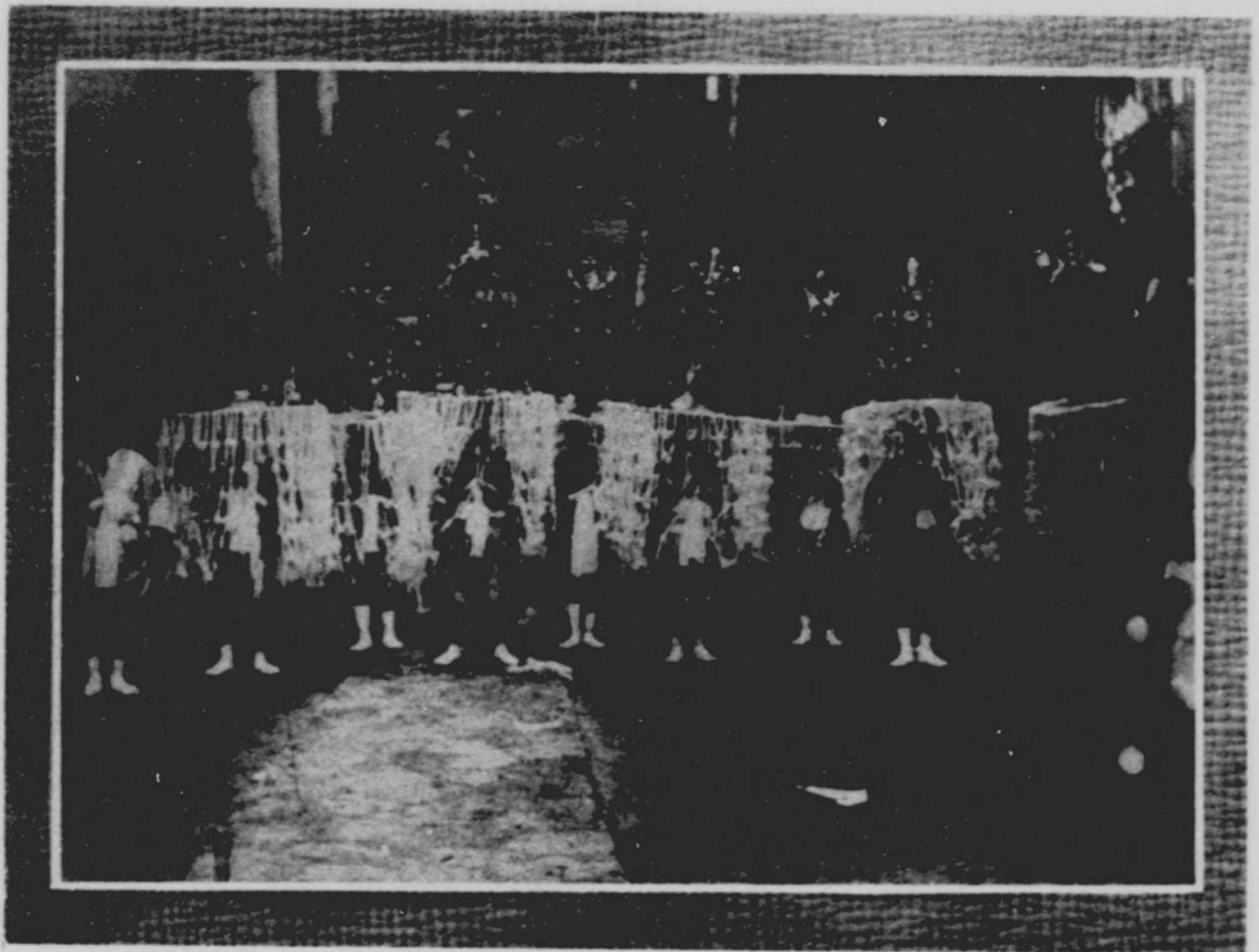
一名義

羯鼓踊は伊勢一圓に行はれる神事舞で、羯鼓と稱する極めて大きな太鼓を胸につけて踊るので、羯鼓踊と申します。沿革は不明で各村々の歌や踊も大同小異であると云はれます。今回出場の高津瀬村では舊暦六月の天王祭と、七月の氏神の祭日に行ひます。人数は幾ら多くてもいゝのですが、最少限度、歌が十八人、法螺貝三人、笛が三人、踊が五人を要します。参加者は十六歳より廿五歳までの男に限ります。

二 歌舞の實際

踊場の中央に八角の行燈を高く竿につけて立て、天下太平、國家安全、五穀成就、村中安全の句を記し、上部に傘を広げたやう紙の花の枝を下げ、之を柳と申します。上に蛇の目の傘をつけ、その骨に村の處女が作る守りをつけます。夜間にするのですが、村内各戸から家族と家畜の数だけの小提灯を青竹に吊して神前に奉るので、境内は火の海と化して晝を欺く明るさです。こゝの天王様は尾張の津島を勧請したもので、昔は津島と同一の祭をしたさうです。姿は巴形の紋を模様にした白の浴衣に黒の角帯、手甲、たすき、紺足袋、草履で、花笠を冠ります。祭禮當日は村人が集まつて、この踊の批評をやかましく云ふので、非常に緊張して演ぜられます。翌日は参加者は村内の處女ある家を尋ねて、浴衣の洗濯と翌年の祭の日までの保管を頼みます。但し一人一枚づゝであります。

三 歌詞



花 笠 舞

羯 鼓 踊

三重縣 鈴鹿郡 高津瀬村

一名義

羯鼓踊は伊勢一圓に行はれる神事舞で、羯鼓と稱する極めて大きな太鼓を胸につけて踊るので、羯鼓踊と申ます。沿革は不明で各村々の歌や踊も大同小異であると云はれます。今回出場の高津瀬村では舊暦六月の天王祭と、七月の氏神の祭日に行ひます。人数は幾ら多くてもいいのですが、最少限度、歌が十八人、法螺貝三人、笛が三人、踊が五人を要します。参加者は十六歳より廿五歳までの男に限ります。

二 歌舞の實際

踊場の中央に八角の行燈を高く竿につけて立て、天下太平、國家安全、五穀成就、村中安全の句を記し、上部に傘を広げたやう紙の花の枝を下げ、之を柳と申します。上に蛇の目の傘をつけ、その骨に村の處女が作る守りをつけます。夜間にするのですが、村内各戸から家族と家畜の數だけの小提灯を青竹に吊して神前に奉るので、境内は火の海と化して晝を欺く明るさです。こゝの天王様は尾張の津島を勸請したもので、昔は津島と同一の祭をしたさうです。姿は巴形の紋を模様染めた白の浴衣に黒の角帯、手甲、たすき、紺足袋、草履で、花笠を冠ります。祭禮當日は村人が集まつて、この踊の批評をやかましく云ふので、非常に緊張して演ぜられます。翌日は参加者は村内の處女ある家を尋ねて、浴衣の洗濯と翌年の祭の日までの保管を頼みます。但し一人一枚づゝであります。

三 歌詞

牛若 踊

- 一 牛若様は幼少なれど、七つの年から鞍馬の寺へ、晝は一日學問なさる、夜は鞍馬の僧正ヶ谷でお天狗様とははやひやうしよ、はやひやうしよは明らかか、さらば手並を見せよとて五條の橋へ進み出て、千人斬をなさるとて、九百九十九人は打たれ、一人足らいでお待ちある。
- 二 所へ辨慶罷出で、牛若様とはよう知らいで、牛若様は手者なれど、火花をちらして切り結ぶ天を拂へば宙を飛ぶ、宙を拂へば天を飛ぶ、難なく辨慶うち負けた。
- 三 家來になされと頼まれて、牛若様は東をさして、奥州へ下る、金賣吉次も奥州へ下る。月日も多いに三月三日、逢坂峠も早や打越えて、海山なんぞを漕ぎ渡る、雨もふらぬに草露の風も吹かぬにもりやまの、矢矧の宿でお泊りよ。

縫 踊

- 一 縫はさまざま、数多けれど、京の六條の若姫達が、召したる縫こそヤラ見事。
- 二 後のくだりを縫はれたよ、孔雀鳳凰の前立所、十七色に色染分けて、あひには金茶の縫らがひ。
- 三 右手のゆきを縫はれたよ、ももやつくしと縫はれたる、木に取りては何々ぞ、蜜柑橋よろづの花よ、椿さくろに木蓮花。
- 四 左手のゆきを縫はれたよ、竹やづくしと縫はれたよ、竹に取りては何ぞ竹、八竹重竹、河原の竹よ、大笹や小笹の縫らがひ。
- 五 前のくだりを縫はれたよ、小鳥づくしと縫はれたよ、小鳥に取りては何々ぞ、雲雀山雀四十雀よしんよ、としんから小鳥、しやきりしんやと前立所、さても見事に縫はれたよ。

庭 入 踊

あのよのお庭で見事なお庭、このよのお庭で踊るとすればしだけ柳をしばうにさして、お庭のいさごがばれよにつく。

四 出演者

監督	仲見 正橋	同	鈴木彌市郎	同	江藤傳重郎	樂太鼓	伊藤 三好
舞臺	水野 巧	同	豊田 徳	同	佐竹 藤橋	同	豊田 稔
笛	鈴木 英雄	同	鈴木 一義	同	江藤 光和	同	豊田 勝
貝	水野 一吉	同	仲見 正	同	水野 文雄	以下	歌 早川 力
	鈴木 清也		江藤 兼三		山下 武男		水野 二三
	豊田 守		倉田 孝男		水野 清		鈴木 正一
	江藤 進雄		水野 吉明		豊田 徳門		鈴木 拙夫
	仲南 正義		仲見 嘉次		早川 文夫		

長持唄とヨササふし 其他

神奈川縣

— 神奈川縣からは箱根と三崎とより出ます。 —

箱根長持唄

足柄郡 箱根湯本町と大窪村

一名義

江戸時代の参勤交代の大名行列や、士農工商が東海道五十三次の宿々を徒歩で往来した際に、箱根八里の上り下りを俗に雲助と呼ばれた人夫が、駕を擔ぎ長持を擔いで交通運搬の衝に當つた事は、人の能く知るところで、何分にも路が險峻を極めたので、左右の肩を換へ／＼歩きました、その肩を換へて一息入れる時に、歌一つづつを歌ふので、それが長持唄、一に雲助唄であります。歩いてゐる最中には、普通の坂や平地はへッへツと云ひ、急坂に限りへツチヨ／＼と云ひます。なほ駕の前に長持が行くので、宿を立つ時には先き馬と云ひ、馬子唄を以て始めるので、今度もその例に従ひます。

二沿革

箱根の長持唄が、いつ頃からはれたかは記録はありませんが、明治初年に東海道線が開通の時には、湯本に三百人、宮の下に二百人の駕昇が居りました。然し旅人が汽車に乗るやうになり、箱根全山の道路改修も行届くやうにな

つたので、右の五百人の人数は、それ／＼故郷に歸り、今や駕も長持も用がなくなつたので、此の歴史ある唄も廢滅せんとしてをります。大名行列に参加して長持を擔いだ地元のものも、もう老いて残り少なくなりました。然し箱根では此の名物を永久に傳へやうとして、若い者に生残つた老人より唄を習はせ、新しい意味での交通運搬機關としての駕も長持も復活させたいと努力してをります。

三歌詞

馬子唄

箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。

長持唄

箱根御番所と新井がなけりや、つれて逃げませう上方へ。

竹になりたや箱根の竹に、諸國大名の杖竹に

こんな小坂も下れば下る、なぜに下らぬ若い殿。

安藝と黒田は國遠けれど、花の御江戸ちや軒並べ。

天氣よければ小田原様の、城の太鼓の遠音さす。

咲いて見事な小田原つゝじ、元は箱根の山つゝじ。

永の道中に雨には降られ、思ひ出します二親を。

こゝは箱根の榎の木平、下に見ゆるは畑の茶屋。

晩の泊りは箱根か三島、但し湯本の願住か。

箱根八里の落葉を屋根に、のせて湯本に戻り駕。

四 出演者

秋山惣次郎	杉崎長太郎	久保田幸吉	山田勝太郎	杉山六太郎
澤邊三太郎	高世重吉	井島彌松	諏訪玉吉	杉崎龜次郎

ヨササぶし その他

三浦郡三崎町

一 名義と沿革

三崎では正月十四日未明、海岸で子供達が左義長の式を行ひ、引續いて翌十五日には海南神社の拜殿に、各部落より少女達が幾組も集まり、神前の扉を開いた前で數番の舞を舞ひます。それから神社を出て町を廻り、希望者の座敷に招かれて、同じ舞を舞ひます。土地の傳説では昔、右大將頼朝が屢々此地に遊んで、風光の明媚を賞し歌舞管絃の宴を張つた時、二町谷の歌舞島に舞臺を設け、浦の乙女達を召して舞はしめたのが始まりであると申します。

二 歌舞の實際

舞ふ者は正月の晴着の上に海南神社の神紋、昇り藤の紋を染めた水干を着て、袴に足袋を穿き、金の前折烏帽子を冠り、持物としては一本扇、二本扇、それに他の土地で云ふ綾竹を、チャツキラコと稱して兩手に二本持ちます。樂器は全然無く、母親達の歌に合わせて舞ふだけで、常は一所に横に並んで居どころで動くだけ、「伊勢參宮」に限り左廻りに圓形に舞ひつゝ廻ります。

三 歌詞

はついで (一本扇……)「の中は舞子が云ふ」

- 一月 初いせくは良けれども、今日の、「初いせ」、初いせ春の御祈禱に、春の初めに酒や肴は良けれども、今日の初いせ、これでおめでたう。
- 二月 お梅白鷺われは御山の黒鴉、鴉につんでた、「つんでた」、ようはひふのえんでせう、鶯がくまりや千鳥に巢をかけて、まりもて巢をかけ、「巢をかけ」、まりやほけきよ鳥。
- 三月 いざや友達、吉野山見物に、さても見事や、「見事や」、八重桃に八重櫻、あの花一枝、「一枝」、國の御土産に。
- 四月 花を擔がば、「擔がば」、卵の花を擔がれよ、櫻花よけれど、「よけれど」、早く散りそや。
- 五月 磯へござらば、「ござらば」、帯をしめてござれよ、磯はまた波は、「波は」、こじやれ波でせう。
- 六月 桶が亂れて、「亂れて」、たが竹が跳ねたとさ、九つ十三と、「九つ十三と」、跳ねたとさ。
- 七月 沖のど中で、「ど中で」、鶴と鶴とが御酒盛、中では千鳥が、「千鳥が」、酌をとりそや。
- 八月 向ふに見ゆるは、「見ゆるは」、新邸と打ち見えるワ、錢すだれ金すだれ、「金すだれ」、黄金門が立つ。
- 九月 向ふ小寺で、「小寺で」、だきをとくのはどの和尙け、だきをばとかぬで、「とかぬで」、女郎のつまをしく。

十月 和尙袂や、「袂や」、がらりめくは何ちやいな、筆か硯か、「硯か」、

お経箱か御手箱か、さては又お殿様の、「御殿様の」、書翰箱でしよ。

十一月 押せや押せ押せ江戸までも、「江戸までも」、

江戸から鎌倉、「鎌倉」、もはや三崎まで。

十二月 寒の師走に麥時にやとはれて、さくりそや、

つねりたや、「つねりたや」、や、ら忙がしや。

チャツキラコ (片假名は舞子の囃子言葉)

めでた／＼の若松様よ、イヤ枝も榮えて葉も茂る、イヤチャン／＼、コリヤチャン／＼。

チャツキラコ打つには、きり／＼としやんと、こ、は四ツ角、人が聞く。

綾を落すな踊子さまよ、一人落さば皆の耻。

富士の裾野にちら／＼見ゆる、お富士詣りか白鷺か。

二本をどり (二本扇)

筑波根のヤートセンソレ峯より落つるみな川の川、戀ぞ積りて淵となる。ソーレーソレ、ヤートセンソレ。

三杯飲んで千鳥足、道が三筋で邪魔になる。ソーレーソレ、ヤートセンソレ。

めでたいものは大黒よ、く／＼り頭巾でこ／＼と。ソーレーソレ、ヤートセンソレ。

ヨササぶし

めでた／＼の若松様よ、オヤヨササノサ、枝も榮えて、チヨイト葉も茂る、

ヤーセンセ、ヨササノサ、オヤツツテン、ツ、テン。

船は稻荷丸、船頭は狐、あとの船方みな狸。(囃子詞省略)

鎌倉ぶし (蝶々の舞)

十七が忍ぶ細みち、小藤がからんで忍ばれぬ、この藤をきり／＼と丸いて、かさねてさよ明かす。

十七が初の妊娠で、淡島さまに御願かけて、この産が軽くおりたら、かねのかねを、

捧げ参らせんしよ、あか／＼ねのかねを捧げまゐらんしよ。(以下略)

鎌倉の御所の祝ひに、十三になる子が、お酌に立つ。(以下略)

御伊勢まゐり

御伊勢まゐりに皆うち揃ひ、村の新禰と一踊りこす、コノ、勇み進んで思ひ立ち、ヨイヤネ、コノセ／＼。

もはや鎌倉藤澤越えて、こ、は平塚、大磯小磯、コノ晩の泊りは小田原よ、ヨイヤネ、コノセ／＼。

未だ二十にならざる人を、新町ふしぎの榎の木坂を、コノとび越え跳ね越え踊り出す、ヨイヤネ、コノセ／＼。

おつれ濱すな沼津と聞いて、旅の御作法も花なぞ／＼と、コノ、吉濱通れば小手招く、ヨイヤネ、コノセ／＼。

今日はさかゆきかみゆいの宿、七つ興津の少しの雨に、コノ、江尻からげてかつばじく、ヨイヤネ、コノセ／＼。

(中略)

土産品々買ひ整へて、下向参りと大湊より、コノ、舟にとく／＼乗らしやんせ、ヨイヤネ、コノセ／＼。

鳥羽の港も早や乗りおとし、音に名高き遠州灘を、コノ、あとに廻つて面白や、ヨイヤネ、コノセ／＼。

なほも島々ながめて走る。向は大島、よにまたしろし、コノ、相模灘とはこれとかや。ヨイヤネ、コノセ／＼。

けにやあれこそ三崎の森よ、下向参りのお禮の踊、コノ、祝ひ納めよ舞ひ清め。ヨイヤネ、コノセ／＼。

四 出演者

鈴木 千枝	本橋 文子	市川 ヤエ	相川 カツ	鈴木 ハツ
鈴木 慶子	大井 ヲウ	松林 セイ	鈴木 花子	鈴木 イセ
鈴木 ハナ	鳥崎 ノエ	鈴木 ヘル	鳥崎ふみ子 (以上囃子)	
鈴木 ハナ	鈴木 ツル	鈴木 キン	青木 サト	山田 タイ (以上囃頭)

備考 時間の都合にて、毎回いろ／＼曲目を取換て御覽に入れます。

鬼 來 迎

千葉縣 匝瑳郡 南條村

一名義

南條村の虫生に今は廣濟寺、古くは鬼堂と呼ぶ寺がありまして、毎年舊盆の法事の折に、本堂の前、野天に臨時の舞臺を架けて、檀家の人々が假面を被り、地獄の芝居を演ずるので、鬼舞とも鬼來迎とも申します。

二沿革

下總には虫生以外にも冬父や小堀に、鬼舞と名づけて地獄の有様を演ずる芝居が前には残つてをりました。此の種の芝居なり、芝居が、つた行列や歌舞は、極樂の莊嚴を現はす廿五菩薩來迎の佛事と相對するので、その起源や全盛の年代は、よほど古く溯ることが出来ませんが、極樂の系統の佛事が、現在も各地に行はれるに比して、地獄の系統の方は今や至つて稀になりました。兩者共に起源當時の意味は別として、中ごろよりは勸善懲惡の意味を寓して、佛敎の普及に役立つたのであります。そして此の虫生の鬼舞は本朝俗誌志にも見えてをります。檀家の者も娛樂の爲にで

はなく信仰の爲に出演し、特に長わづらひの者は、進んで亡者の役に扮して、鬼に責められ、病氣本復を祈る習慣であります。

三 曲目と人物

今日、虫生に辛くも残つたのは、元より昔の全部ではなく、大序、賽の河原、釜入、死出の山等の地獄の責苦を現はす部分と、鬼堂の縁起を脚色した一篇の物語の部分と二つより成り、後者は古いものではありません。登場人物は閻魔大王、俱生神、三途河の鬼婆、黒鬼、赤鬼、男女の亡者、幼兒の亡者、観音、地藏、石屋和尚、殿様推名安藝守連高、奥方、二人の間の娘妙西信女の亡霊、下郎。今回は都合に依り全部は上演せず、前者より大序、釜入、死出の山を御紹介いたします。

四 詞 句 (死出の山より)

観音 鬼王この罪人を許せ放せ。 鬼 抑々この罪人と云ツば、娑婆國中の大惡人なり。

観音 その所以如何。 鬼 堂塔佛閣に一度の參詣もなく、一紙半錢の施しなく、

晝は世路の暇を惜しみ、夜は鴛鴦の襖を重ね、空しく財色滋味を食るばかりなり、

疾く去り給へ。 観音 鬼王の斷るところ道理なり、然りと雖も我等が大悲の萬行は、

八寒の水に身を閉ち、八熱の焰に身を焼き、無間を住家となし、衆生の苦患に代る故なり、

譬へしやうがく、しやがしはく、てつぶの苦患たりと雖も、自ら代りて之を受くべきなり、

只この罪人を許せ放せ。娑婆の善惡は淨玻璃の鏡の面に、聊か争ふ事なし。

鬼 それ我等の姿と云ツば、慳貪の業鬼となつて身を責む、自ら執著の信念は鎖となつて身を縛り、

三毒は刀劍となりて身を切り、五欲は火焰となりて身を焦がし、自業自得の理、

何ぞこの罪人逃るべけんや。 觀音 鬼王の斷る所歴然の道理也、然りと雖も我等萬行の功力、大悲の惠日の照らす時は、八寒の水も解け、六道滿行の涼風吹く時は、八熱の焰も消ゆるとやら、其上一本の塔婆を立て、大乘涅槃の金文を書き、鬼神を應動なさしむべきなり。只この罪人を許せ放せ。鬼 なき人の今は佛となりけり、名ばかり残す苔の下露、さては成佛いたせしか。

五 出演者

關覽……岩澤 平 信田 淳 土屋 師(交代) 俱生神……深田 三郎 信田 信 岩澤 茂(交代)
鬼婆……深田 信治 伊藤 正實(交代) 黒鬼……渡邊 英 伊藤 榮(交代)
赤鬼……深田 正就 伊藤 文夫(交代) 亡者……土屋彦右衛門 信田文雄(交代) 觀音 土屋一朗 監督 鈴木有敏

花 笠 舞

その他

山形縣 飽海郡 吹浦村

一名義

山形秋田兩縣の境にそびえて日本海に臨んだ鳥海山は、直立七千餘尺、周圍三十餘里、奥州第一の高山として、夏は登山者の多い山であります。山上には大物忌神社が祀られ、出羽の國一の宮として古來朝廷の尊信も淺からず、今國幣中社に列してをります。此の神社の拜殿は山麓の吹浦村と藏岡村の二ヶ所にあつて、隔年毎に兩所で大祭を行ふ定めで、吹浦の方で新曆五月八日の祭日に、昔から行はれてきた古樂が、今回御紹介のものであります。沿革は古い記録が絶えて何も分りません。

二 歌舞の實際

此の古樂は五月七日の宵祭と、八日の本祭の兩度に行ひ、花笠舞は拜殿前に臨時に三間四方の舞臺を作つて、その上で舞ひ、他の舞は境内に、おのころ島に象どつた池があつて、その池の中の島で演ずる定めであります。宵宮の時は花笠舞が最後になり、本祭には最初になります。最初の時は長刀を持った先拂が、先づ舞臺の四隅の柱に引廻した注連を長刀で切取ると、弓取が舞臺に昇り神前に一揖し、鬼門に向つて天下泰平國土安全を念じて矢を二度放ち、然る後に舞人が昇つて舞ひます。舞終ると冠つてゐた花笠を四方に投げ棄てるので、舞臺を取巻いた參詣人が争つて奪ひあひます。その花笠は竹で直徑三尺二寸の輪を作り、それを紙で張り花を挿し、笠の縁には八つの四手を垂れます。装束は烏帽子狩衣、びんざらを持ちます。囃子は笛と太鼓。

花笠舞の他に大小の舞があり、宴舞龍王とも大小の舞龍王とも申します。昔は僧衣を着たさうですが、今は狩衣を着て扇を持つて二人で舞ひ、音楽は笏拍子で、見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりけりと歌ひます。大小の舞といふ舞は、日本の舞踊史上に有名なものです。これが其名残か否かは俄に分りません。

猿田彦舞は舞人一人、音楽は笛に太鼓に羯鼓。

田樂舞は諾册二神の舞とも云ひ、舞人一人、音楽は笛と太鼓、持物は鉾と楯。歌は大小の舞だけです。

三 出演者

花 笠 舞

丸岡 孝三 大西 重賢 大沼 茂利 藤枝 雄一 長谷川芳彦
佐々木重泰 筒井 誠一 小西 峯正(以上舞) 中村 光治(先拂)
永田三之助(笛) 大野 繁彦(笛) 林 豊作(太鼓)

猿田彦舞

丸岡 孝三(舞)

後藤 茂雄(太鼓)

中村 光治(羯鼓)

大野 繁彦(笛)

長谷川芳彦(鉦持)

大小の舞

筒井 義晴(舞)

後藤 茂雄(舞)

大西 重賢(笛拍子)

田樂舞 (踏踏二神の舞)

菅原 重蔵(舞)

永田三之助(笛)

大野 繁彦(笛)

林

豊作(太鼓)

備考 時間の都合に依り、毎回曲目を變更して御紹介いたします。

伊豫萬歳

愛媛縣 松山市

一 名義と沿革

萬歳は越前、三河、その他の各地にあります。今回御紹介の萬歳は四國の伊豫のもので、九州地方に巡業もいたしますが、大體は郷土の娛樂となつてをり、特に明治以來は、神社佛閣の祭事、佛事の餘興、婚禮その他のめでたい祝ひの餘興として、青年が稽古して演ずるものになりました。凡て男子のみが勤め、女子の役も男子が女装します。樂器は太鼓、三味線、拍子木を用ひます。

二歌 詞

柱 揃

徳若に御萬歳と、四海波こそ静かにて、國も治まる時津風、枝も鳴らさぬ御代なれや、相に相生の松こそめでたう。コリヤ〜才藏、只今の御萬歳に柱揃と相聞えしが、變つて太夫に話はないか。モシ太夫さん、話も段々ござんす。なるほど才藏はや、あき方から、祝はや、三ヶ日、かざりはや、雜煮に田作代りするめ萬歳と申します、それが後の太夫の所望ぢや、昔よりも柱揃始まり左様に。

徳若に御萬歳と、昔陰世頼朝公が、柱揃の事なれば、一本の柱には一天が世界な、治まる御代のしるしかや、二本の柱には、につこと笑たが大黒さん若えびす、三本の柱には左近が右近ぢや、内の惡魔を追出す、四本の柱には、四方が眞ほめぢや、唐橋のしるしかや、五本の柱には、五葉の松こそ榮えけれ、六本の柱には、櫓も舵も揃えて、千石船の港入り、七本の柱には七福りんとせ七えびす、八本の柱には、八棟造りしよ、ひわだぶき、九本の柱には、九夜のさかづき進められ、十本の柱には、十ぢや〜〜福壽ぢや。

伊豫名所づくし

名所づくしの事なれば、さてめでたきは松山の、ほとりに近き温泉や、病を治する效能の有難かりける事ぞかし、氷とけなむ山越の、血染櫻も咲きそめて、さてまた伊豫の御寺の、薄墨櫻もコレ名所、香りも吉田の差桃や、見渡す伊豫の小富士山、波々浮ぶる風早の、腰折山や小かきつばたもコレ名所、立岩川の七不思議、出舟入舟、駒の足爪嫁が石、ひとつひとつもコレ名所、さて善王寺の御寺は、男子山には柱石、女子山には兜岩、

男子女子で名も高い、さて太山寺のお寺は、間野の長者が建てたやら、七丁下ればねちけ竹、かすかに聞ゆる太鼓やら、古蹟といひし江戸山の、姥櫻とて今に枝葉が榮えます、佐々木のお宮や保免の名むあみ満つるゝ敎使橋、こゝに今出と残されし、玉生のお宮や健連寺、建立ありし御寺の、光を保つ浄土寺の、杉の枝葉が榮えゆくこと、誠にめでたう候ひける。(以下略)

忠 臣 蔵

徳若に一には富士、二には鷹の羽打違ひ、三に上野の花と散る、あまた仇討多けれど、中で赤穂の面々は、雪の降る日も風の夜も、主君の恨みを晴らさんと、東に下りて大星と、艱難辛苦も幾干ぞ、頃しも極月十四日、雪の降る夜に仇を討ち、譽れは世にも名を残す、誠にめでたう。(以下略)

三 出演者

舞 岡山 俊雄 舞 西山 強 舞 友枝 慶明 木藏 森田 明義
拍子木 友近 友一 三味線 近藤 照雄 監督 三好幾次郎
備考 伊豫萬歳も此のほかに曲目が多いので、毎回取かへて御紹介いたします。

南 條 踊

山口縣 玖珂郡 岩國町

一 名 義

南條踊は舊岩國藩の吉川家に傳はつたもので、明治以前までは藩士の子弟に限り稽古して、多く夏に催したとも、慶事ある時に催したとも申しますが、弘化三年に一時中絶、それ以後明治十六年に再興、二十三年、四十一年、引續き大正四年、十五年等に於て、或は東宮殿下台覽の爲め、御大典奉祝の爲め演じたものであります。但し藩士の子弟に限ると云ふ以前の習慣は今はありません。

二 沿 革

この踊りの沿革は確な事は分りませんが、傳説によると、天正年間に南條伯耆守元次が、安藝の毛利家に背き密に織田信長に通じました。岩國の吉川元春は怒つて伯耆に出馬したところ、元次は二心なき旨を云ふので、一時表面上和睦いたしました。然るに元次は常に歌舞を好んでゐたので、元春は書を送り、岩國の踊も見せたいし伯耆の踊も見たいと申出たので、元次は非常に喜びました。依て岩國より吉川の武士多勢、今の東伯郡羽衣石の城に赴き、歌舞を試みて城内の者を油断させ、合圖と共に拔刀して一氣に城を陥れ、元次は遂に城を落ち延びたと云ふ物語があります。これを以て想像するに、元來は吉川家に古くから行はれてゐた踊が、此の時の縁起を祝つて南條踊と呼ばれたと覺しく、今回御紹介のものは、その名残であります。

三 歌舞の實際

約十五六間四方の廣場に幔幕をめぐらし、數ヶ所に篝火を焚き、中央に歌ひ手が居り、踊子は場の一隅より幕をあけて出て踊り、終つて入ります。歌ひ手は大人で紋服に袴、手に扇を持ちます。踊子は少年ばかりで、定紋つき黒の筒袖、袴がけ、白鉢巻、手甲、袴、白足袋、草鞋、一刀を帯して唐團扇を持ち、先頭と殿りは兜の鍔形をつけます。昔は二百餘人も踊りましたが、明治以後は五六十人になりました。樂器は太鼓、手拍子、サ、ラを用ひます。

四 歌詞

一 入場の際

二 入場 めでたき御代の御庭のかゝり、黄金の鳶が舞ひかゝる。

三 ざめき 袂に硯短冊入れてン、みな花々にン、歌を掛ふ。ヤアあらめでた。

天に黄金の花咲きて、地に銀の實こそなりけれ。ヤア淀川の深き底なる

鯉鮒を、袖をも濡らさで捕るがふしぎや。

四 走り踊 ヤア音に聞えし吉野の櫻、いさや歌ふて花を見て行かう。

ヤア音に聞えし千本の櫻、いさや歌ふて花を見て行かう。

ヤア浮雲を、帯に駿河の富士の山、廻りて見れど結び目もなや。

ヤア宮島の彌山の空の宵時雨、濡れてや鹿がひとり行くらむ。

五 由利踊 ヤア淀の川瀬の水車、誰をまつやらくと。

ヤアつゝじ椿は山照らす、ヤ花の千松ヤレ御所照らす。

ヤア君も夜舟に召すならば、我も車で都まで。

ヤア浮雲を、(前出)ヤア宮島の(前出)。

六 享隆 ヤア播摩の書寫の書寫山寺の、ヤ御兒の立、ヤ今朝こそ見たれ

ヤ京編笠に、ヤ四手切りかけて、ヤ御顔に月のン、ヤほのぼのと。

ハンヤサア御顔に月のン、ヤほのぼのと。白金のべて、ヤ袴にかけて

黄金の褂でン、ヤ米量る、ハンヤサア黄金の褂でン、ヤ米量る。

ヤア浮雲を(前出)、ヤア宮島の(前出)

七 中引 ヤアおんちやれ若衆、ヤ御暇申す、明年参らう、又参らう。

八 戻し ヤア空立つ鳥もン、戻せば戻るン、今一度戻せ、押戻せ。

一起 ヤア皆花々はン、咲くこそ下れン、葵の花はン咲き上る。ヤアあらめでた、

天に黄金の花咲きて、地に白金の實こそなりけれ。

二 由利踊 ヤア喜藏花壇に竹植えて、本は尺八中は笛、末は歌書く筆の軸。

ウイヨサア。ヤア麻の中なる糸蓬、ヤレよれて懸るは縁で候。

ヤア宮島の(前出)、ヤア住吉の御前の沖の汐あひに、浮み出でたる淡路島山。

三 走踊 ヤア住吉の、四社の御前の反橋は、誰がかけつる中反に。

ヤア清水の、橋の欄干に腰かけて、瀧のかゝりを眺むれば、ヤアラ見事。

ヤア宮島の(前出)

四 返踊 ヤア近江の國の六角殿から、真正坊への引出物には何々ぞ、ヤ獨鋼、

三鈴、鈴、錫杖に、ヤ花瓶、香爐、燭臺、天目、見豪硯や墨紙筆に、

雜紙薄葉杉原などを引合しては、ヤ唐の掛繪を三幅一對お引きあるアサアサ。

ヤア宮島の(前出)、ヤア住吉の御前の(前出)。

五 引揚 おんちやれ若衆や、御暇申す、明年参らう、また参らうくく。

五 出演者

中村 平八	重野 忠夫	山本 光	今田 勇	神村 義夫
松村 茂	廣田 定康	龜井 安雄	八幡 克章	小島 孝雄
保田 傳	上田 純一	佐藤 俊雄	長谷川好滿	前川 重喜 (以上踊子)
渡邊 敷男	佐藤 佛治	龜井 武雄	吉田 泉	錦 旌旗 (以上踊士)
森脇 善治 (監督)				

備考 この踊は全部を續けてやりますと、長時間を要しますので、やはり毎回分けてやります。

郷土舞踊と民謡の會記録

第一回 大正十四年 十一月廿六日より三日間	獅子舞 埼玉縣 川越市	田植歌 千葉縣 香取郡佐原町	太刀踊 高知縣 土佐郡鏡村	祝儀踊 東京府 伊豆新島	飾山囃 秋田縣 仙北郡角館町
牛追唄・山唄 岩手縣 九戸郡江刈村	相馬流山 福島縣 相馬郡原町	追掛節 鳥取縣 東伯郡高城村	大久保踊 兵庫縣 三原郡八木村	草刈唄他 栃木縣 河内郡篠井村	鬼太鼓 新潟縣 佐渡郡新穂村
茶摘唄 京都府 久世郡宇治町	粘土唄 山梨縣 中巨摩郡	囃子田 廣島縣 山縣郡新庄村	玄女節 福島縣 會津一市五郡	茶摘唄他 和歌山縣 東牟婁郡四村	新濁縣 北松浦郡中野村
江州音頭 滋賀縣 大上蒲生兩郡	大門踊 長野縣 埴科郡松代町	まだら節 石川縣 鹿島郡七尾町	白太鼓踊 宮崎縣 兒湯郡上穂北村	自安和樂 長崎縣 北松浦郡中野村	靜岡縣 周智郡水窪町
麥屋踊 富山縣 東礪波郡平村	餅搗唄 東京府 豊多摩郡野方町	拍板神事 東京市 汐草區	神代踊 岐阜縣 大野郡宮村	茶摘唄他 和歌山縣 東牟婁郡四村	
追分 新潟縣 中頸城郡春日村	巡禮歌 奈良縣 南園堂講中	歌と踊 沖繩縣 八重山郡石垣島	どつさりぶし 島根縣 隱岐島		
面浮立 佐賀縣 小城郡戸刈村	念佛踊 香川縣 綾歌郡瀬宮村	えんぶり 青森縣 三戸郡八戸町	六齋念佛 京都府 紀伊郡吉祥院村	白石島盆踊 岡山縣 小田郡神島外村	

後記

大正十四年の開館以來毎年恒例として催し來つた本郷土舞踊民謡大會も既に六回に達した。其の間に上演された舞踊民謡は巻末記載の通り三十府縣三十六種の多きに上り、そのいづれもが有つローカルカラー乃至藝術的香氣は可なり廣い範圍の人をして嘆賞措く能はざるらしめて居る。そして是が唯に民衆娛樂の向上發展に貢獻したのみならず、進んで愛郷觀念の振作、國民意識の徹底に寄與した點も決して尠くはなからうと思ふ。果して然らば是は單なる年中行事ではなく一の立派な運動でなければならぬ。而して斯程の運動は國民の感情が露骨になつて何事も魅惑的尖端的な表現でなくては満足しきれない現代の世相に直面して一層切實に其必要を感ずる。

本會は幸ひ第一回以來斯界の權威柳田國男先生高野辰之先生小寺融吉先生の御指導と、民族藝術の會有志各位の御援助により毎年多大の好評を博しつゝ圓滿に成長し來つた。今其第六回を開くに當り切に前記各位に負ふ所多きを憶ひ茲に記して些か感謝の敬意を表すると共に出演地方當局の幹旋並に出演者各位の勞を謝す。

昭和六年四月

日本青年館

昭和六年四月十日印刷
昭和六年四月十五日發行

定價金參拾錢

編輯 東京市四谷區霞丘日本青年館内
神田海之助
印刷 東京市芝區本芝四ノ二二
根岸彦六
印刷 東京市芝區本芝四ノ二二
誠文社印刷所
發行所 財團 日本青年館
東京市四谷區霞丘明治神宮外苑
法人
電話 青山 四二六〇、四二六一
四二六二、四二六三
四二六四

契約高

壹億四百五萬六千餘圓

積立金

貳千四百六拾七萬八千餘圓

福德

本社

大阪北區堂島濱通

生命

東京支店

麹町區丸ノ内ビルヂング第五階
電話 一六五四
九ノ内話 二七六八
二六六八

- ▽養老保險
- ▽利益配當養老保險
- ▽特種養老保險
- ▽勤儉生命保險

世界一...佛蘭西エラールピアノ

メイソンハームリン
シユウエヒテン
シードマイヤー
ホルーゲル
ヤマト
ピアノ發賣元



三菱輸入ピアノ一手販賣

小野樂器店

銀座五丁目三番地
電話 銀座 九〇二二番
四〇二二番

御菓子司

東京青山四丁目電停前

日本青年館御用

青柳

電話〇八三一
青山二三〇三



階上ハ
喫茶と食堂

小百貨店出現

荒物 株枴 繩蔴類
金物 漆器 陶磁器
指物 家庭用具一式
日用品百貨



店商阪協

地番十目丁三町北山青區坂赤
番九九八山青話電

用御館年青本日

絶對優秀
國產樂器

山葉
ピアノ



堅型金五百圓 以上各種
平型金千四百圓

御便利な月賦の規定もありません
象牙鍵盤八十五鍵五百圓のものが
十九圓の月賦で御求め出来ます
詳細カタログ進呈

日本樂器會社東京支店

銀座七丁目

最高の

技術

正確な

期間

日本青年館地下室二
撮影場アリ

用御館年青本日

館真寫山青

(際停電) 目丁五山青市京東

御菓子司

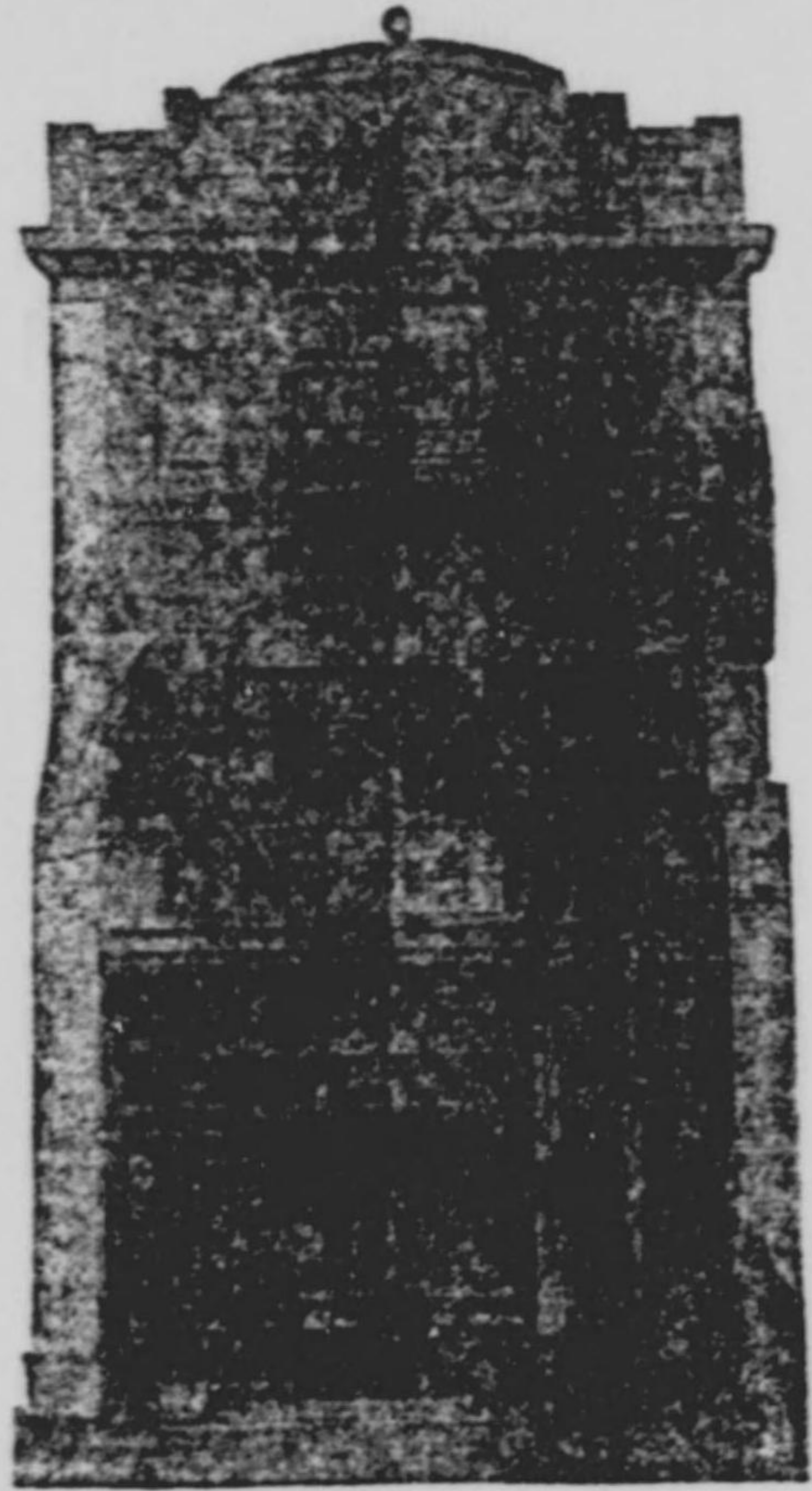
東京青山四丁目電停前

日本青年館御用

青

柳

電話〇八三一
青山二三〇三

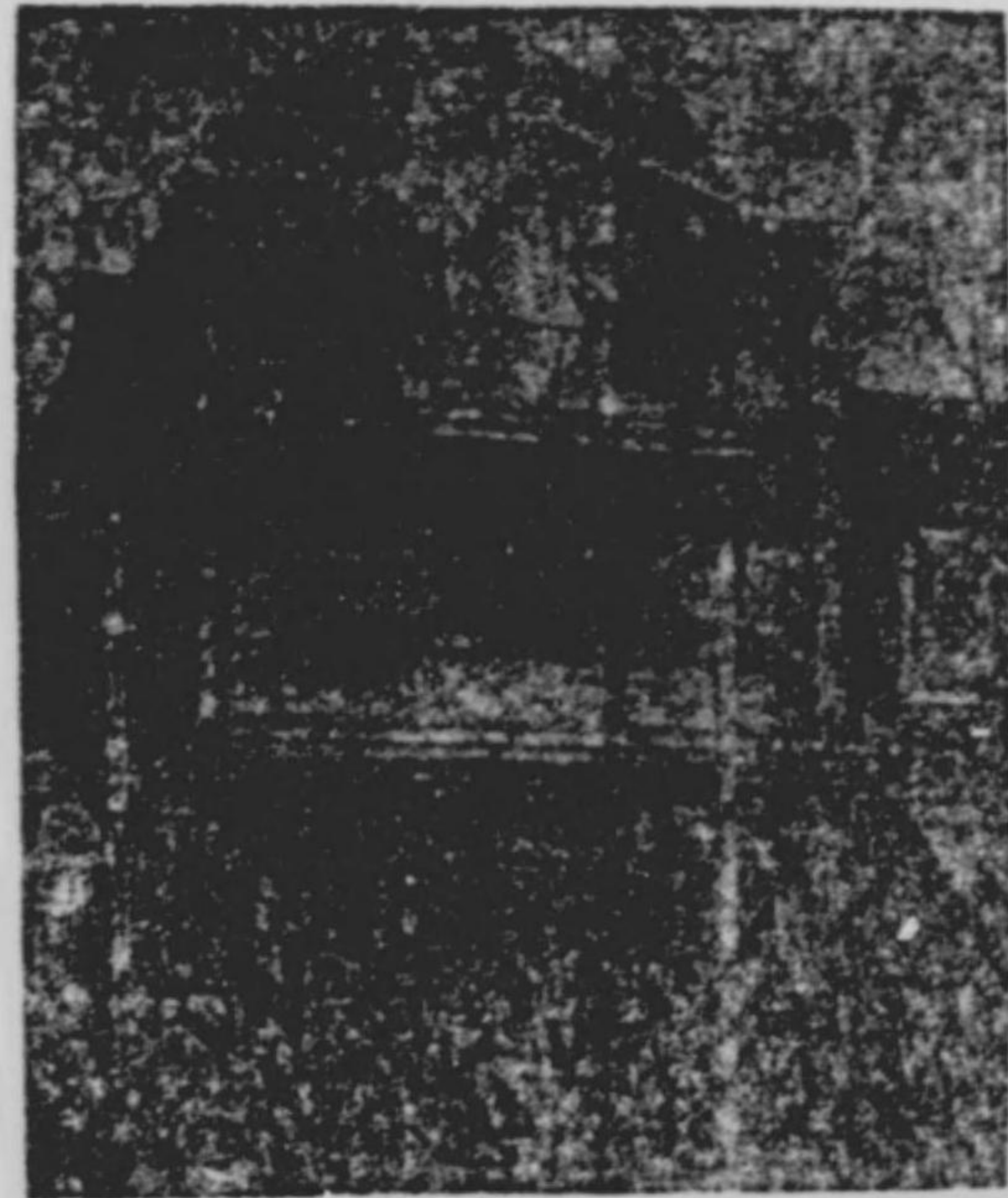


階上ハ

喫茶と食堂

小百貨店出現

- 荒物 株枴 繩蔴類
- 金物 漆器 陶磁器
- 指物 家庭用具一式
- 日用品百貨



脇阪商店

赤坂區青山北町三丁目十番地
電話青山八九九番

絶對優秀
國產樂器

山葉
ピアノ



豎型金五百圓 以上各種
平型金千四百圓

御便利な月賦の規定もあります
象牙鍵盤八十五鍵五百圓のものが
十九圓の月賦で御求め出来ます
詳細カタログ進呈

日本樂器會社東京支店

銀座七丁目

最高の

技術

正確な

期間

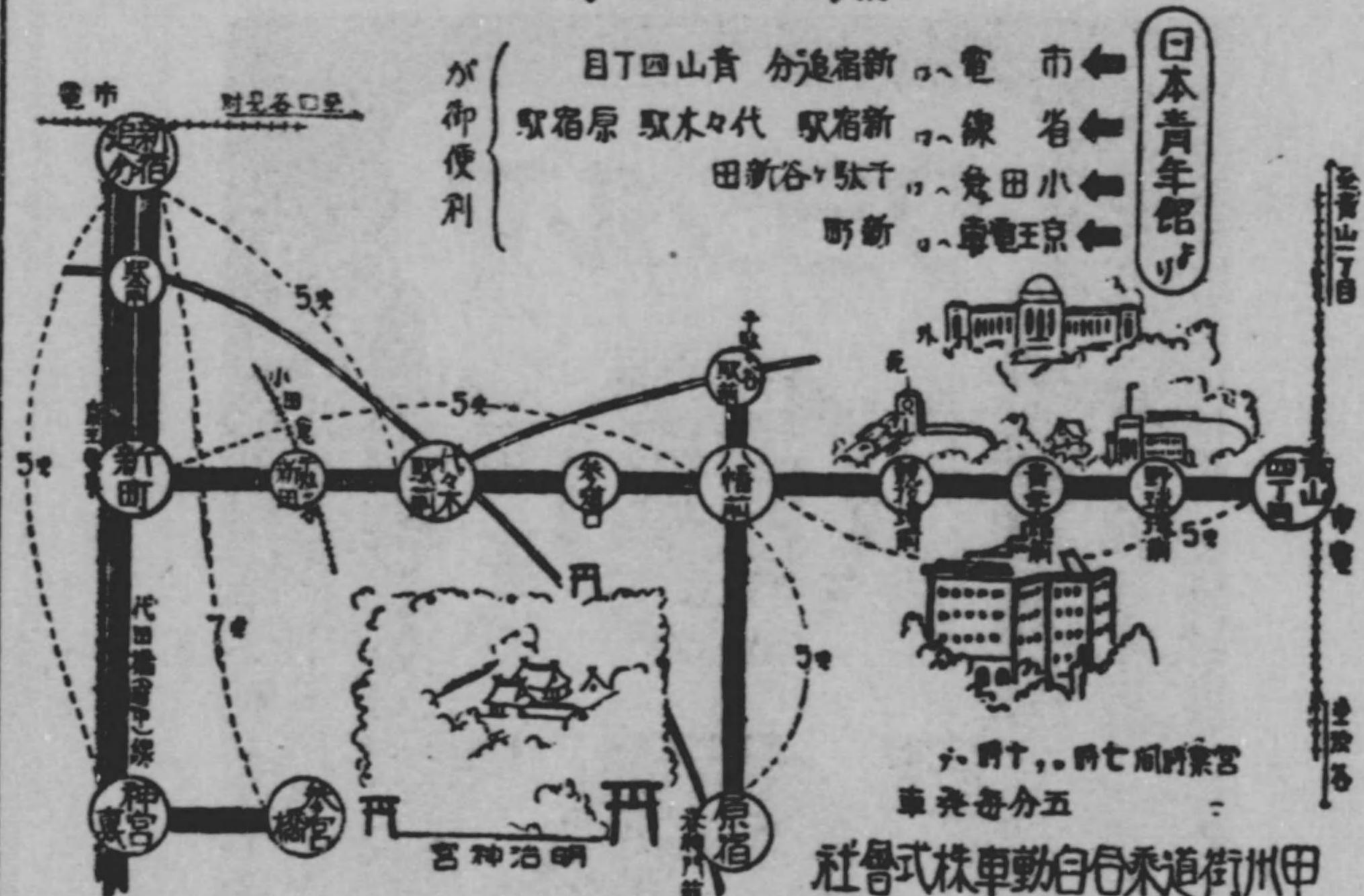
日本青年館地下室二
撮影場アリ

日本青年館御用

青山寫真館

東京市青山五丁目(電停) 日

内乘車動自合乘



社魯式株車動自合乘道街州甲

階上洋食部

ビ
ー
ス
ル
ン
タ
ス
ド



青山四丁目電停前

種長洋食部

電話青山 一三三六

東京市外遊谷町

植木商東光園

日本青年館御用

マールジョウ

味噌 醸 醤油



日本一のおいしいマールジョウ醤油!
○は完全を表し醸はカモス即ち醸は完全に醸造された代表的旨取高級品

三越松阪屋白木屋松屋府公設市場その他いづれの酒店にもあり
宮内省御用達 日本醸造工業株式會社

當青山タクシーは最新式自動車ノミ取揃ヘテ居リマス、皆様御上京ニ成
 リマシテ日本青年館ニ御泊リノ節ハ是非御使用願ヒマス、市内ハ一臺片
 道一圓デ参リマス、尙團體、市内見物其ノ他時間乘リノ場合ハ特ニ御相
 談ニ應ジマス。

御用命ノ節ハ日本青年館宿泊部ノ受付ヘ御願ヒ致シマス。



用御館年青本日

青山平和タクシー

店主 川端 安吉

一丁目營業所

東京市赤坂區青山北町一ノ一
 電話青山二四八九番

御所前營業所

東京市赤坂區青山北町一ノ一
 電話青山二八〇〇番

五丁目營業所

東京市赤坂區青山南町五ノ七
 電話青山六六一六番

アイスクリームの



富士アイス
 クリーム

御用命は

電話本所 (73) 一六七〇七九二六

工場 深川通汐濱町八番地

製品御用先

東京鐵道局
 仙臺鐵道局
 東京市電氣局
 陸軍被服本廠
 遞信省
 日本青年館

營業品目

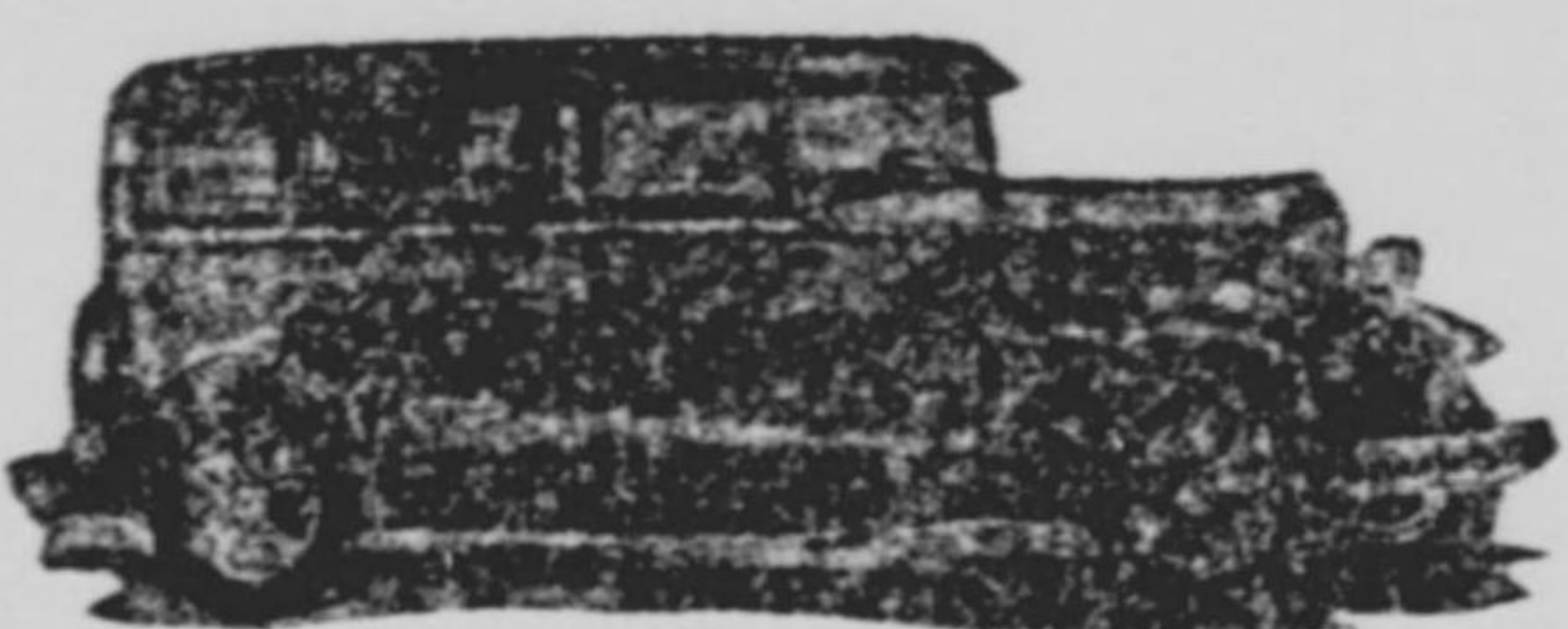
蒲團、蚊帳、改良寝具一式
 羽織蒲團、絹、綿、麻織物
 絹羽蒲團、毛織物並ニ製品
 毛布、敷物、室内裝飾品
 其他ホテル用品一式

瀬川商店

東京市神田區和泉町一番地
 電話下谷(83)七〇一九番
 振替貯金東京四四三七〇番

當青山タクシーは最新式自動車ノミ取揃ヘテ居リマス、皆様御上京ニ成
 リマシテ日本青年館ニ御泊リノ節ハ是非御使用願ヒマス、市内ハ一臺片
 道一圓デ参リマス、尙團體、市内見物其ノ他時間乘リノ場合ハ特ニ御相
 談ニ應ジマス。

御用命ノ節ハ日本青年館宿泊部ノ受付ヘ御願ヒ致シマス。



用御館年青本日

青山平和タクシー

店主 川端 安吉

一丁目營業所

東京市赤坂區青山北町一ノ一

電話青山二四八九番

御所前營業所

東京市赤坂區青山北町一ノ一

電話青山二八〇〇番

五丁目營業所

東京市赤坂區青山南町五ノ七

電話青山六六一六番

アイスクリームの



富士アイス

クリーム

御用命は

電話本所 (73) 一六七〇七九二六

工場 深川通汐落町八番地

製品御用先

東京鐵道局
 仙臺鐵道局
 東京市電氣局
 陸軍被服本廠
 遞信省
 日本青年館

營業品目

蒲團、蚊帳、改良蓆共一式
 羽織袴、蒲團、絹、綿、麻織物
 富士印、毛織物並ニ製品
 毛布、敷物、蓆、敷物
 其他ホテル用品一式

瀬川商店

東京市神田區和泉町一番地
 電話下谷(83)七〇一九番
 振替貯金東京四四三七〇番



純國産

ニットレコード

日東蓄音器株式會社

▼熊本民謡 若吉

- 球磨の六調子
- キンニヨムニヨ節
- 東雲節
- 新地節

▼熊本新民謡 月夜菊

- オリヤンコ節
- ボンボコニヤ節

▼熊本小唄 若夜菊

▼隱岐小唄 春之助

▼民謡 澤智子

- 志摩はよいとこ

▼津輕俚謡 工藤美榮子

- 津輕小原節
- 津輕じよんがら節

▼俚謡 蓮田兵衛

- 相馬二遍返し

松本丈一

- 佐渡おけさ

今井 董山

- 庄内おぼこ

▼俚謡 今井董山

- 松前追分
- 博多節

大友ふさの

- 遠島甚句
- さんざ時雨

作 榮

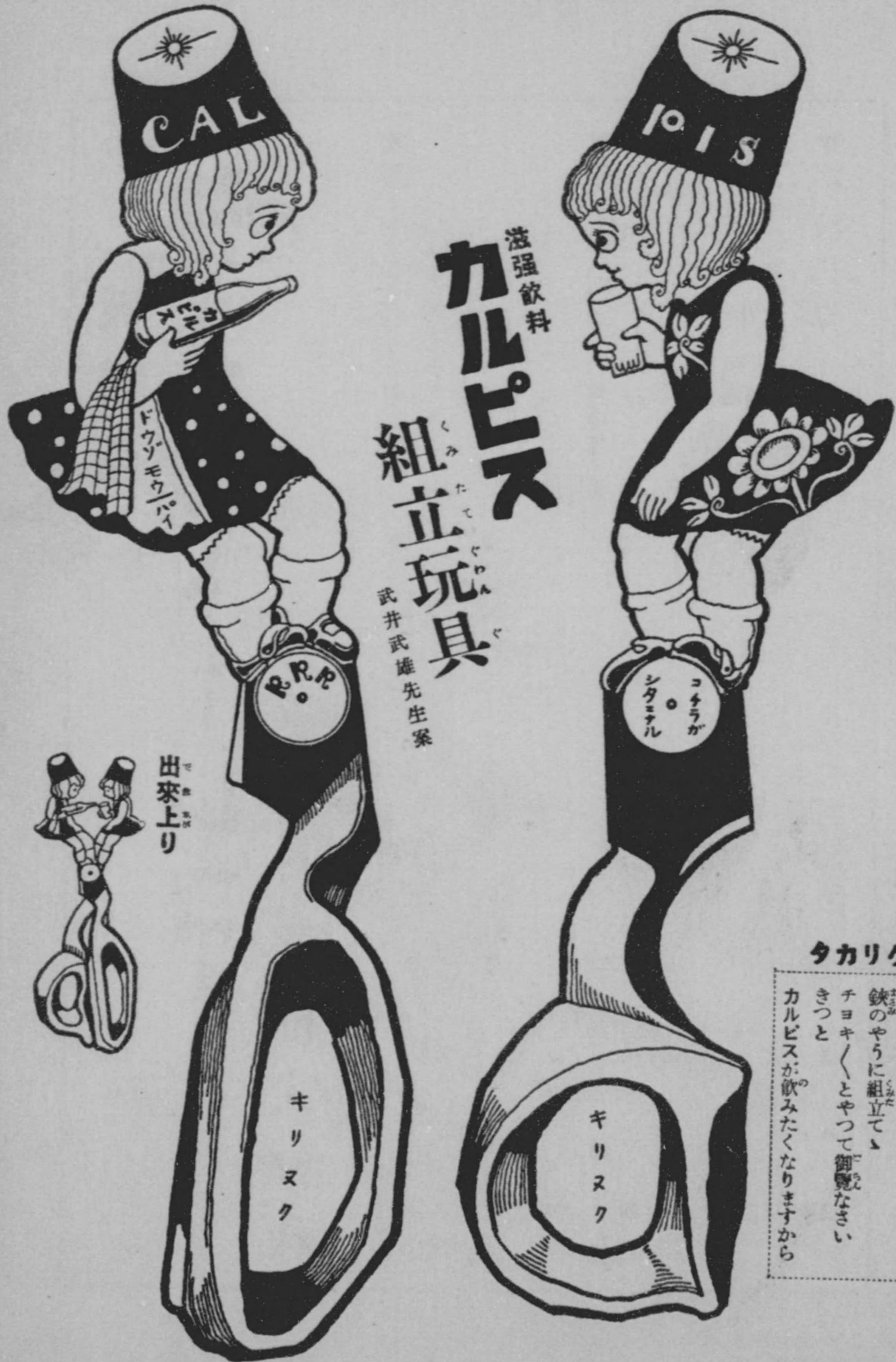
- 山 中節
- 琉球節

佐々木清子

- 草津節
- 串本節
- 新木節

タカリクツ

お好きな色をぬって
裏打して切抜き
鉄のやうに組立て、
チヨキくとやつて御覧なさい
きつと
カルピスが飲みたくなりますから



滋強飲料
カルピス
組立玩具

武井武雄先生案

出来上り



キリヌク

キリヌク

磨齒ブラック

朝食
と
後に



お顔のアレない品質優良の

ク
ラ
ブ
石
鹸

磨歯ブラック

朝食
と
後に



お顔のアレない品質優良の

クラブ石鹸

8
3